

小学校中学年の部

特選 課題図書部門

「111本の木を読んで」



宮地小学校四年

本田 朋

私は、女の子です。女の子として生まれて、お父さんと、お母さんに祝福されて生まれてきました。たん生日のお祝いも学校も習い事もしています。私はそれがふつうだと思っていました。ですがこの本ではちがっていました。インドでは働き手とされている男の子が生まれるとお祝いされますが、女の子は、けっこんの時にたくさんのお金を使うのがつかりされていきました。私はこれを知った時とても悲しく思いました。なぜなら、自分がその立場として考えるととても悲しいし、生まれてくるのをがっかりされるなんて、つらいと思っただけです。

この本に出てくる、スندانル村長は、自分のむすめを亡くしたきっかけに、村のむすめたちが、祝福され勉強もして十八才までけっこんしないようにどりよくした人です。同時に村の自然を守るために、女の子が生まれるたびに111本の木を植えることを進めました。

スندانルさんのおかげで、村には豊かな自然がもどり、むすめたちは、水くみや畑仕事だけではなく、学校へ通うようになりました。それは、今でもつづいているようです。

私はこの本を読み「ジェンダー」という言葉と、「エコフェミニスト」という二つの言葉を知りました。ジェンダーというのは、性のちがいでなく、社会的、文化的に作られた男女の差をいうことです。お母さんに聞くと、この本のインドだけではなく、昔の日本でもそういう時代があったと言っていました。

身近に、ジェンダーのようなことがあるのかと、考えてみました

た。私は思いつかなかったもので、姉に聞いてみました。
「色じゃない？」

と言われました。たしかに男は青、女は赤という印象です。これは、差別ではないけれどジェンダーのようなことが、身近にあると感じました。

「エコフェミニスト」とは、全ての命あるものを、大切にすること、男の子も女の子も平等にあつかうこと、自然かんきょうを、大切にすると、考えのもった人のことでした。

私のまわりでは、家族だけではなくペットも大切にしているし、ごみの分別やリサイクルもしています。でもテレビのニュースに、世界では戦争がおこっていて、かんたんに人の命がなくなったり、プラスチックの問題で温だん化がおこったり、まじしい国の子どもや、女性がずつと働いていて勉強ができないじょうたいになっていると知りました。

私は、これを知ってすごく悲しかったです。戦争で多くの人の命や、美しい自然が、かんたんになくなってしまうからです。そして、地球温だん化の問題で、自分ができる事は、ゴミはきちんと分別する、自分のゴミは自分で持ち帰る、自然を大切にすることです。

だから、自分のまわりの自然や、どんな命でも大切にしたいです。

(リナ シン) 作

『111本の木』 光村教育図書 出版

【講評】

本から知った「ジェンダー」や「エコフェミニスト」について、また今、世界で起きている問題についてよく考えました。自分と比較して、多角的な視点から思ったことを数多くまとめることができましたね。朋さんの感じたことが、目の前にはっきりと伝わってくる書きぶりで、とても素敵です。